

平成31年度 令和元年 神戸短歌祭 (於)県民会館パルテホール

兵庫短歌賞表彰式・総会・現代歌合せ



第201号

題字出口草露
発行 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方
兵庫 県歌人クラブ
会 計 〒676-0011 高砂市荒井町小松原2-125 石原智秋
振替 01110-5-6903
印刷所 ㈱ 甲 南 堂



総会・現代歌合せに先立つ兵庫短歌賞表彰式で受賞の言葉を述べる矢野一代氏

兵庫短歌賞 新人賞 矢野 一代さん
奨励賞 高山 美根さん
特別賞 森永 理恵さん
水田三和子さん
木下加代子さん
岸野 和夫さん

平成31年(令和元年度)神戸短歌祭は4月29日(祝)午後1時より県民会館パルテホールにて開催。兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞・特別賞の表彰式と総会の後、判者に真中朋久氏(塔)をお迎えして現代歌合せ(歌の詠みと読みをめぐって)が行われた。
総会司会は清水昭男・廣庭由利子両氏。安藤直彦代表の開会の挨拶に続き表彰式。兵庫短歌賞は「うぶ毛」の矢野一代氏と「自由のかたち」の一海美根氏。新人賞は「化粧」の高山葉月氏と「最近アドバロン」を見ません」森永理恵氏の2名。奨励賞に「祈りを編みて」の水田三和子氏。又今回特別賞として「如月の風」木下加代子氏、「謂れも高き故郷よ」岸野和夫氏が選ばれ、安藤代表よりそれぞれ賞状が授与された。受賞者の「歌を作り始めて20年、ご指導いただいた中川昭先生に感謝申し上げます。今後も「継続は力なり」を信じ精進する所存です(矢野氏)」「闇夜にいた頃はいつも一緒にいてくれたのは言葉だった気がします。思いがけず出会えた短歌という詩形と、これからも長く一緒にいられますように(一海氏)」といった挨拶の後、選考委員を代表して小林幹也氏より選

考経過と選評が披露された。次に議長に芝本政宣氏を選出。兵庫県歌人クラブ31年度総会が開催された。安藤代表より30年度事業報告、続いて福島妙子氏による会計報告、兼貞靖行氏の会計監査報告があった。次いで新役員の紹介に先立ち生田、小林両副代表三津野事務局次長の退任挨拶があり、また辞任幹事の報告、新役員と新幹事、地区通信員の紹介が行われた。
新年度事業計画の発表の後、安藤代表は「歌集批評会など

の活動で更に若い人との繋がりやを密にしながら進めてゆきたい」と抱負を述べた。
休憩後は「現代歌合せ」判者真中朋久氏、司会新屋修一氏、朗詠山田恵子氏。歌びと10名(1名欠席)が左右に分かれ力詠を競い合った。最後に真中氏の「詠いつづけるための」お話をいただいた。詳細は2〜5頁。
桂副代表の閉会のことばを以って午後4時半閉会。参加者100名。(保田ひで)

令和元年度新役員

- 代表(兼事務局次長) 安藤 直彦
副代表 新屋 修一
事務局次長 桂 保子
会計 福島 妙子
会計監査 石原 智秋
森嶋 靖行
藤本 朋世
顧問 石橋 妙子
楠田 立身
藤井 幸子
事務局委員 大西よし子
芝本 政宣
廣庭由利子
藤本 則子
保田 ひで
山本 圭子
吉田千代美
小畑 庸子
野瀬 昭二
加藤 直美
鈴木 裕子
藤岡 成子
藤本美智子
山田 文
山本みさよ

令和元年度幹事

- 青田 綾子
足立 勝義
安藤 直彦
生田よしえ
石原 智秋
伊藤左重子
浮田 伸子
大西よし子
片山田佳子
加藤 直美
小林 幹也
島田 英樹
新屋 修一
田岡 弘子
中島真喜子
廣庭由利子
藤岡 成子
前田 昭子
松田 辰子
森嶋 郁子
矢野 一代
山田 文
山本みさよ
吉野 節子
山本 圭子
吉田千代美
足立 晶子
飯田 進
池本登代子
岩藤 敦子
内海 淳子
尾崎まゆみ
桂 保子
黒崎由起子
芝本 政宣
清水 昭男
鈴木 裕子
中川 昭
西橋 美保
藤本 妙子
福島 眞世
船橋 貞子
牧野 秀子
三津野幸代
保田 ひで
山田 恵子
山本 圭子
吉田千代美

会員数 449名(令和元年6月)
(※太子新)



判者の真中朋久氏

平成31年(令和元年度)神戸短歌祭「現代歌合せ」は、判者として真中朋久氏をお迎えし、とりわけ「歌の詠みと読み」についての深掘りを期した。真中氏は結社「塔」に所属、朝日カルチャーセンタ―講師、毎日新聞「兵庫文芸」選者、昨年はNHK短歌の選者もされている。

今回の題は、陰陽五行説に因んで「木・火・土・金・水」の五つ。歌びと左と右それぞれ五人を配し、五番の歌合せで対峙した。歌びと左は、大江美典(欠席)・西村徹・中島眞喜子・飯田進・岩尾淳子各氏。歌びと右は、西村康平・小林幹也・足立勝歳・多田まどか・黒崎由起子各氏。

# 「現代歌合せ」 題「木・火・土・金・水」 —歌の詠みと読みをめぐる—

氏。読師すなわち司会進行は新屋修一氏。歌びと(評者)の読みを集約しながら巧みに論議を進められた。講師すなわち歌の朗詠は山田恵子氏。格調高く涼やかな声調で作品を披露された。以下、歌合せ五番の内容を報告する。なお、歌びとの批評は自分の組の作品はことさらに称賛し、相手の組の作品はことさらに難詰するという暗黙の習わしがあるが、今回の歌びとはすべて心優しく(?)、偏った歌評がみられなかった。そこで、左右の歌びとの発言(歌評)を分けずにまとめて要約した。

## 一番 題「木」

(左)

・グーグルのストリートビューでは探せない木香(木)の咲いてみた庭 大江美典

(右)

・旧友は水平線へと木片を投げる東京生活を知り

西村康平

【歌評】左の歌について。グーグルのストリートビューという便利な検索機能を使っても、実際に足を運んだ場所は探せない、記憶の中にしかないといつた失望・諦念が読みとられ、昨今のITに対する文明批評もあると指摘された。また、第二句「ストリートビューでは」の字余りが気になるという意見と、そこに不承の心ゆらぎを感じるという意見に分かれた。「題材は現代的、テーマは普遍的」という歌の特徴の分析もあった。右の歌について。都会生活にせちがらさ・居心地の悪さを感じているであろう友達が故郷の海に来て木片を投げている……。どこかほっとするような哀愁のただよ情景。社会人として生きることの苦さを知ったばかりの若者の感傷との読みが大勢を占めた。投げたのが小石でなく木片であることへの違和感はないとのこと。

【判詞】どちらも好きな歌。

<h3>明石大門短歌会</h3> <p>野瀬 昭二</p> <p>明石市立勤労福祉会館 毎月第一土曜日</p> <p>連絡先 伊藤敦子 〒673-0011 明石市西明石町 四一七二一 ☎(078)九二七-四四三九</p>	<h3>芦屋水甕短歌会</h3> <p>歌会 (PM1:30~4:00) 第2土曜日(芦屋市民会館) 第4金曜日(同上)</p> <p>・連絡先 〒663-8123 西宮市小松東町2-1-3-401 ☎(0798)43-6820 加藤直美方 ・事務局 〒659-0042 芦屋市緑町1-16-102 藤本潮子方 近くの方の御参加歓迎します</p>	<h3>小野短歌会</h3> <p>松尾 鹿次</p> <p>代表 芝本 政宣 副代表 阿尾日出子 会 計 藤井 久子</p> <p>事務局 〒675-1334 小野市大島町六二一 ☎090-13895150二二</p>
<h3>明石短歌会</h3> <p>明石公園内会議室 毎月第一金曜日 第三火曜日</p> <p>連絡先 田岡弘子 〒673-0845 明石市太寺四ノノ三〇 ☎(078)九二二-二六七三</p>	<h3>淡路歌人クラブ</h3> <p>顧問 子務男 悦 樹子 荒来 清水 昭 英 良 濱田 水田 井 英 良 清島 亀 井 良</p> <p>代表・事務局長 副代表 会 計</p> <p>〒656-0651 南あわじ市伊加利1062 TEL・FAX (0799) 39-0835 清水 昭 男</p>	<h3>海市短歌会</h3> <p>編集発行人 中川 昭</p> <p>発行所 〒650-0027 神戸市中央区中町通三一―十五 神戸コーポラス七〇一 ☎(078)三七七-〇二九九</p> <p>神戸支部 〒653-0813 神戸市長田区宮川町 四一八一―三三三 明石多美子方</p>

左の「ストリートビュー」では「の字余りに関して。英語を片仮名表記した場合、最近では、一字一音ではなく、英語の音節のように二音か三音で早口に読んでいるのではない。だから字余りによる心のゆらぎの効果は感じられない。右の歌、「旧友」とあるが、それを言うのは十年早い(笑)。「東京生活を知り」は観念的。東京から帰省した親友・同窓生といったことを明示すべき。判定は、右の作者の今後を期待しつつ、左の歌を良しとする。

二番題「火」

(左)

・てすさびに火鉢の灰をかき  
ていし父の孤独の遠き断片  
西村 徹

(右)

・線香花火の模様を浴衣にき  
はだたせ神社につづく小径  
へと消ゆ 小林幹也

【歌評】左の歌について。家長として威張っていたはずの父、その父が火鉢の灰をかきませている遠い日の記憶の像がある。そこに今にして父の孤独の気配を察知している。その哀惜の念に共感を誘う歌であるが、下句が説明過多、抽象的ではとの指摘があった。右の歌、なにか物語の一シー

ンを見る思いがする。歌われた対象は少女であろうが、はつきりとは示されず、私との関係も見えない。ゆえに秘め事めいた匂いがする世界との読みも。一方、情報が多すぎる。頭でつかちのひびきとの批評があった。

【判詞】

いずれも映像が浮かび印象的。左の歌、記憶はそもそも断片、「父の孤独の遠き断片」との表現は概念的であり、熟年の今となって察せられたといった心境を示してはどうか。右の歌は、歌の印象を鮮やかに見せようとする作為が見える。もとより、「きはだたせ」の表現はまだまだ動くと思う。なお、初句の字余りは全く気にならない。判定は左とする。

三番題「土」

(左)

・土づくり有機肥づくりと励  
みある友の作業場に魚粉が  
匂ふ 中島眞喜子

(右)

・野良に出て土耕せと天の声  
ゴム長履きて唐鞆握る  
足立勝蔵

【歌評】

どちらの歌も農業の現場に即した力強い詠出で、「事実」の持つ説得力をうかがわせる。左の歌は、土づくりに勤しむ友に対する温かい

眼差しをも感じられる。人間の本能的な臭覚に訴える「魚粉が匂ふ」が歌の印象を確かにしている。また、全てを言ってしまうと、読者が想像力を働かせ入り込む余地がないとの意見も出た。右の歌については、「天の声」に春の到来をうかがわせるとともに農事に携わる作者の使命感が感じられる。「妻の声」とも解釈できるという読みもあった。一方、「天の声」で歌のリズムが切れ、言葉のつながりがぎくしゃくしているとの意見も出た。

【判詞】

両方とも力強く野太い歌。左の歌は、意味の似通う「土づくり有機肥づくり」と重ねて言う必要はないのでは。「土づくらむ土づくらむ」とリフレインする手もある。右の歌では、「ゴム長履きて唐鞆握る」とそのまま言うのではなく、ゴム長靴を履いた感触、あるいは唐鞆を握った感触のどちらかに絞った方が歌の印象がはつきりするのではと思う。大いに迷うところだが、判定は右とする。

四番題「金」

(左)

・夏果てて金券ショップに売  
れ残る「恋の片道切符」が  
一枚 飯田 進

花鏡短歌会

石橋 妙子

〒658-0073 神戸市東灘区岡本2丁目7-2-211  
連絡先 三津野 幸代 TEL(078)431-8665  
〒658-0027 神戸市東灘区青木2-2-1-617

一運営委員一

安藤 成子 池本 登代子 井上 玲子  
奥田 洋子 金田 康子 黒部 道子  
田口 幸子 富田 成子 長岡 一美  
中川 裕子 増井 定子 松井 勝美  
水田 三和子 三木 雅子 三津野 幸代  
安田 千富美 山本 みさよ

香寺短歌会

代表 岩田百合子

会計 景山 昌乃

連絡先  
〒679-2151 姫路市香寺町香呂438  
生田 よしえ  
☎(079)232-4003

コスモス 加西勉強会

第2木曜日 13:00~ 中央公民館  
第2金曜日 13:00~ アステシア加西

連絡先  
〒675-2365 加西市畑町577  
藤岡 成子  
☎(0790)42-0415

薫風

主幹 長谷川 正

入会金・添削料 不要  
月刊・会費 月1,700円

発行所  
〒651-0077 神戸市中央区日暮通4丁目1-7  
(サニーコート日暮202号)

TEL・FAX (078)221-0023  
振替 01160-2-6567 薫風社

コスモス藍の会

猪口 昌子 小野はつね 小野 幸恵  
久保 崇子 久米川孝子 黒田 富栄  
田中 恭子 土山 純子 林野千代美  
弓岡あき子

〒671-0121 高砂市北浜町牛谷三八八  
久米川 孝子

コスモス 葛の花

会場 多可町八千代区  
八千代プラザ  
第2水曜日 午後1時

代表  
〒677-0121 多可郡多可町八千代区  
花の宮1171  
岸本 しげ子  
☎(0795)37-0680



左から判者の真中朋久、司会の新屋修一各氏



左から歌びと右の西村康平・小林幹也・足立勝蔵・多田まどか・黒崎由起子各氏

(右)  
 ・掬われて放されてまた掬われて金魚のようにすり減ってゆく 多田まどか

【歌評】左の歌。「恋の片道切符」は一九六〇年代のアメリカ

力のポップスの曲名をまず思い出させる。夏の終りの佇しい雰囲気背景に、若者の失恋を歌っているが、作者の青春時代のほろ苦い追憶にもつながっているとの読みがなされる。平成の前、昭和の臭いがする。この俗っぽさ・泥臭さに反って救われる感じもするとの見方も…。右の歌はなんと痛ましい状況が直截に歌われている。仕事に疲れ切った姿との解釈に加え、働き方改革が叫ばれる今日の社会詠の側面もあるとの見方もあった。過重勤務に疲弊したご自身の娘のことを思い、感きわまる評者もいた。職場詠と限定せず、家族との軋轢、男女の愛憎など、生きづらいい人のさまざま場面としても読めるとの意見も出た。

【判詞】左の歌「恋の片道切符」を持ってきたのはたしかに面白い。しかし、そのタイトルに頼りすぎたきらいがある。「恋の」ではなく、実際の駅名への片道切符とした方が味わい深いのでは。右の歌、仕事にまつわる悲嘆との解釈だけでなく、苦しい恋愛の歌とも読める。いずれにせよ、そんな辛く危うい状況を金魚掬いの場面に見立てたところを評価する。判定は右とする。

【歌評】両方とも今回の歌合せ十首の中で一二を争う歌。左の歌について。翡翠が現れやがて消えるまでの動きと時間経過があり、さらに「水をはさんでながく見ている」という一種の隔絶感が表現されている。「水」は川のことであろう。見ているこちらは現実の世界で、向こうは翡翠のサンクチュアリ(聖域)、手の届かない美しい世界との読みがなされた。上句を読みくだした時、消えたのは枝との誤読をした。この誤読を誘う文脈はいかがなものかという意見もあった。右の歌については、幼い頃の回想の歌としての読みが多かった。プールあるいは浴槽で潜って遊んでいた際に母から「もう上がりなさい」と優しくたしなめられたという思い出。水中で聞く母の声は、まさに「まろく」「ぼあんぼあん」であろう。「ぼあんぼあん」というオノマト

五番 題「水」  
 (左)  
 ・翡翠のいる枝そして消えた枝ながく見ている水をはさんで 岩尾淳子

(右)  
 ・水中に聞く音まろくぼあんぼあん遠くで母の呼ぶ声 黒崎由起子

**白珠** 入社費 五〇〇円  
 社費 費六ヶ月 六〇〇〇円  
 旧号見本 切手 四〇〇円

兵庫県内支社  
 神戸白珠の会  
 宝塚白珠の会  
 加東支社  
 加東支社  
 淡路支社

〒562-0001 箕面市箕面三十一五十八  
 白珠社  
 代表 安田 純生

**短歌連盟** グループ代表  
 会長 安藤直彦  
 竹菅新尾船 引貴明  
 田原家上節子  
 幸艶イサ子  
 男子

[連絡先] 0790(84)0150 新家 イサ子

**コスモス 東加古川勉強会**  
 会場 加古川総合文化センター  
 第2金曜日 13:00~

連絡先  
 〒675-0016 加古川市野口町長砂1217  
 新屋 修一  
 ☎(079)423-5168

**但丹歌人** (季刊)  
 発行 但丹歌人会  
 代表 尾形 貢  
 編集発行人 中島眞喜子

〒669-5229 朝来市和田山町宮438  
 ☎(079)672-2334

足立美津子 飯田 和子 稲葉 節子  
 衣川由弥子 高橋 博子 中島眞喜子  
 平野 君枝

運営委員

流派を超えた短歌交流誌  
 楠田 立身 編集

**象** (SHO)  
 入会歓迎  
 〒670-0843  
 姫路市城東町清水13-7-404  
 楠田方 ☎(079)285-1695  
 短歌ぐるうぶ象の会

創刊 宮 終二  
**コスモス**  
 〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17  
**姫路支部**

支部代表 飯田 進  
 運営委員 新屋 修一 大西 恒祐  
 大西知永子 金砺 靖子  
 連絡先 〒671-2233 姫路市太市中678  
 飯田 進 ☎(079)269-0513





左から歌びと左の岩尾淳子・飯田進・中島眞喜子・西村徹各氏

へには、包みこまれるような安らぎを感じるとの評価。なお、回想の歌としてではなく、羊水の中で胎児が聴く母の声といった幻想の歌としても読めるとの指摘もあった。

【判詞】

左の歌は、初めに時

間を言い、それを承けて空間を展開してみせるという知的な文脈の構成を意図している。その構図の読みとりに触手を伸ばさない読者もいれば、モダンアートのオブジェのように楽しむ読者もいるだろう。右の歌は、羊水説も捨てがたい。作中の母が存命かどうか

は確定する必要はない。判定は右とする。

最後に判者のいちばん好む歌として、歌合せの判定とは逆に五番の岩尾淳子氏の翡翠の歌が「美意識による歌の構成」という点で推された。

以上五番の歌合せ、三勝二敗で右に軍配が上がった。この後、判者より以下の含蓄深いお話をしていた。

真中朋久氏からの提言 「詠いつづけるために」

●人の評価に一喜一憂しない

歌会の出詠歌や投稿歌の評価に対して、その度に一喜一憂する必要はない。推敲不足の問題はさておき、歌の良し悪しを客観的に測るのは難しく、その場だけで決まるものでもない。後になって違った評価を得たり、歌集に収まった時に印象が変わる場合もある。「塔」の河野裕子は「名歌ばかり並んでいる歌集はつまらない」とまで言っている。また、当初注目されても、褒められなくなることもある。

●愛唱歌は「心のお守り」

ほんとうに「いい歌」というのは、他人の評価とは別のところにある。自分にとって「いい歌」かどうか。折

にふれて口ずさむ愛唱歌がほしい。私の愛唱歌の一つに大伴家持の「うらうらと照れる春日に雲雀あがりころ悲しもひとりし思へば」があるがこの歌を口ずさむととにかく心が癒され、元気になる。遠く昔の家持が近く感じられる。私にとってお手本であり、「心のお守り」のようだ。

●十年後の自分に向ける歌

自分の歌の最善の読者は自分自身ではないか。自作を読むということとは、そこに籠められた嘘偽りのない気持ちとたしかに出会うこと。そもそも歌はだれに向かつて作るのか。歌の先生や歌友ではなく、自分ではないのか。私は十年後の自分に向かって歌を詠んでいる。つまり、その未来の自分がどのような読みをするのかを見定めた。あるいは逆に十年前の若い自分なら、今の歌をどう受けとめるだろうと想像したりする。十年後がないと言うなら(?!)、あの世の自分、そしてまた今は見向きもしてくれない子供や孫が見てくれるかも知れない。なかなか思うような歌が作れない私だが、「在りえた自分・在るべき自分」との出会いを求めて、歌の道に精進したいと思う。

(壽刺)《記録》藤本朋世

平成30年度 第3回幹事会報告

3月29日(金)、午後1時より神戸市勤労会館にて開催。出席幹事26名。委任状21名。三津野幸代氏の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、議長に芝本政宣氏を選出。

◆平成30年度事業報告

- ① 4月29日(祝日)、県民会館にて神戸短歌祭及び兵庫歌人クラブ総会を開催。「兵庫短歌賞」授与。講演高橋睦郎「うたふ」ということ」。
② 6月18日(月) ふれあいの祭典兵庫短歌祭設立委員会。加西市役所10時から。
③ 6月21日「会報」第199号発送。1000部。結社広告37社。
④ 7月12日(木)、兵庫県政150周年記念式典に安藤代表参加。
⑤ 10月30日(月)、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会。作品審査会後、第2回幹事会。
⑥ 11月22日(木)、『年刊歌集』第58集刊行発送。編集人三津野幸代。応募総数247篇。350部発行。
⑦ 12月8日(土)、加西市健康福祉会館にて「ふれあいの祭典兵庫短歌祭」開催。オープニングはこども狂言「根日女」。入賞者表彰・作品総評。シンポジウム「短歌・俳句・

現代詩のあいだ」。パネリスト高橋睦郎・小川軽舟・山下泉各氏。コーディネーター林和清氏。参加者334名。
⑧ 12月13日(木) 兵庫県文化懇話会。
⑨ 12月26日「会報」第200号発送。850部。歌会広告46件。
⑩ 1月21日(月)、兵庫県歌人クラブ新年懇親会於ポートピアホテル。参加者30名。
⑪ 3月9日(土)・10日(日)、伝統文化体験フェスティバル於県公館。講師廣庭由利子・加藤直美
⑫ 3月20日(水)、平成30年度兵庫短歌賞選考委員会。
◆平成31年第1回幹事会 (第3回幹事会会後)

- 〈退任役員〉土居正・生田よしえ・小林幹也・三津野幸代
〈新任役員〉桂保子・石原智秋
〈退任幹事〉河村公美・来田務・小谷博康・来田康男(逝去)・志方弘子・本多勝彦・益永典子(逝去)・南輝子・矢内温代
〈新任幹事〉岩尾淳子・片山田佳子・加藤直美・鈴木裕子・山田恵子・山田文・山本みさよ
〈新任事務局員〉鈴木裕子・山本みさよ
○神戸短歌祭・年刊歌集・兵庫短歌祭など、新年度の活動内容と役割分担の骨子を審議・確認。

平成30年度  
兵庫短歌賞

矢野 一代(海市)



1955年生まれ  
神戸市在住  
「海市」所属  
現代歌人協会会員  
第4回「海市賞」  
2017年度「海市」  
年間優秀賞受賞  
歌集『父の男の』の  
ち

うぶ毛

- ・何もかも捨ててあなたの許へゆくことなく「平成」さいごのさくら
- ・初春を本音ふたことみことほど「上善如水」にほどく
- ・そうそんな言い訳していた白桃のうぶ毛に光はじけるころは
- ・思いつきばかりの人に善き人と振り回されて終える「平成」
- ・喉仏おおきく上へまた下へわれの知らざるわれを説くなり
- ・靴底の左のわずか磨り減りて磁石のような君に傾く
- ・嬉々と卵抱きしときも過ぎれば子袋しずかに居眠りのなか
- ・角とれぬままに飲み込む金平糖丸くなりなど通話は切れて
- ・義理のみの弔い終えし夜の車窓あの目の目のねめつけてくる
- ・煙管もて「ききよう」くゆらすおはぐるの明治おんなの祖母にあいたし
- ・ビールならスーパードライ 物言わぬおんなの舌が回りはじめる
- ・採られざる柿はのどかに太りゆきや

兵庫短歌賞

一海 美根(水甕)



1960年生まれ  
神戸市在住  
2015年「水甕」  
入会、短歌を学び始める  
2018年「髪を切る夢」で水甕新人賞受賞

自由のかたち

- ・空からの伝言降らせてあるやうな白い景色にスタバで見入る
- ・降りさうで降らない空を傾けて揺すつてみたい雫のほひ
- ・夜のバスは仕事帰りの匂ひする乗つてたころは気づかぬままで
- ・紙切れと言ひきかせても友の辞令吾を撃ち抜きし日確かにありき
- ・あんなにも急いで歩いてゐたのかと会議に戻る友の背見送る
- ・偽りは正義の貌をしてゐたり君の手帖に挟まれてたりす
- ・手を伸ばすその先わずか五センチがゴールに届かぬ夢をまたみる
- ・疎外とふ気づけば吾の事なりし何ごともなく組織は回り
- ・一定の速度かつきり求めらるバス降りるとき小銭出すとき
- ・芽吹きつつ刈られゆく街路樹はととのへられるうつくしさのため
- ・誰も皆ひささな画面を観てゐるねひとりぼつちを誤魔化すみたいに
- ・うつくしいものしかなくてこの町は裸足でなんか歩けやしない
- ・こんなと胸奥叩かれゐるやうな宇多田ヒカルを繰り返し聴く
- ・揺らぐのは行きたいはうがあるからで認めるわたしがぬればいいだけ
- ・夕焼けに照らされてをり標識は空疎な権力かがやくやうに
- ・人生はマラソンのやうと言はれても短距離走が好きだつたんです
- ・いつからかひとり仕様になつてゐたハンズ向かひのスターバックス
- ・ふつくらと泡立つ朝の珈琲にとほき南の農園の風
- ・自由とは如何なるかたち港よりたつたひとりで出航したり
- ・吾知らぬ吾が次つぎ歌となりこの世の風を切り走りゆく

新人賞

高山 葉月(塔)



1977年生まれ  
尼崎市在住  
「塔」所属  
短歌歴2年  
趣味 歌集収集

化粧

- ・花に棲む小人のように柔らかなシーツに包まる朝の裸体
- ・目覚ましが鳴る前に目が覚める日のカレンダーには花マルが咲く
- ・ラジオから浜村淳の声がして珈琲たてる朝のルーティン
- ・輪郭の緩み始めた横顔が三面鏡の奥に整列
- ・顔ヨガのシマリスポーズで引き上げる地球になびく四十路の頬を
- ・乳液は菩薩のように掌を優しいカーブにして受けとめる
- ・あの事を無かつたことできますかコンシーラーを厚く上塗る
- ・眉山の位置が肝心だと姉が教えてくれた三日月の眉
- ・ハイライト入れて凹凸だしている平たい顔の民族だから
- ・唇を「たらこたらこ」とからかった福本君の現在を知らない
- ・新しい口紅おろす瞬間の胸の高鳴りあの頃のまま
- ・口紅の裏にはSUNと記されて太陽色

- ・の紅さす真冬
- ・手の甲に余分な粉を撫で落とすチークブラシの山羊は優しい
- ・腕時計の裏に刻んだ「FOREVER」がひねもす我に張りついている
- ・動物の名前が入った色だから温かそうねと選んだニット
- ・貴方からどの方向で見られても見つかりませんように純び
- ・すべらかに太陽色の唇が公転してる貴方の舐
- ・ミッシオンを終えたスパイがマスク剥ぐように化粧を落とす洗顔
- ・洗顔で心化粧は落ちなくて素顔の私までもう一步
- ・私がつろ火で崩れゆくまでのカウントダウン始まつている

### 新人賞

森永 理恵(塔)



1995年生まれ  
神戸市出身  
明石市在住  
「塔」所属  
岡山大学短歌会出身  
第3回大学短歌バトル優勝  
趣味 読書・映画鑑賞

### 最近アドバルーンを見ません

- ・インターン終わりあなたと異世界の話をして三番ホーム
- ・ギターとか似合っていないと言われても泣かなかった いや泣くべきだった

- ・「芯が強く、諦めたことがありません」最近アドバルーンを見ません わたくしの三面鏡は生意気で業種すべてを否定してくる
- ・就活解禁の日にスーツ姿のわたしを「俗物だな」と父が言う
- ・恋人さえいればきつとと友が言うそれですむなら自殺はなくなる
- ・海開きついでに面接解禁のわたしをち深刻な風物詩
- ・まだ若い人事の趣味を傾聴する同志諸君をながめるわたし
- ・思い出せる限りの色に染められたアドバルーンが空に逃げ出す
- ・あなたから視かれるとき火球であるわたしをスクリーンを食べて帰ろう
- ・新卒一括採用で潤うもの鳩がわたしの手をもがき出る
- ・秋めいたリップをつけて回り道みなに等しく空があること
- ・ギリギリのところで案外笑っている意外なわたしにお茶で乾杯
- ・リクルートスーツで寄るたびレジの人優しくなつてゆく夕立
- ・野良猫の目になってリクルーターを見ていた彼もわたしも落ちた
- ・働きたくないと薄情なわたしたち留年した友人にこぼす
- ・あなたにもアドバルーンを見せたくて河川敷まで素足で歩く
- ・文学部出てシステムエンジニアという選択 色のない虹が出る
- ・霜の降る朝方にまだ就活かと聞かれていいえ、と答える いいえ、卒論と保湿クリームにとりかかるとあなたを目蓋の裏に溶かして

### 奨励賞

水田三和子(花鏡)



1948年生まれ  
神戸市在住  
「花鏡」所属  
石橋妙子氏より指導を受ける  
短歌歴8年

### 祈りを編みて

- ・今ならば振り返つてよいと覚悟せる ころの扉天に開かむ
- ・まう一人家族の増えると夫に告ぐ首夏の日明るく輝きてあり

### 特別賞

木下加代子(ポトナム)



1929年生まれ  
尼崎市在住  
平成12年兵庫県神戸県民局長賞受賞  
平成18年コブカルチャイ短歌教室  
平成25年「ポトナム」趣味 花作りなど

### 如月の風

- ・書きなれた(平成)されどゴール見ゆ 多年はじめのこの朝の水
- ・凍て空に櫂の檣の触れる見ゆ間なく 卒寿か雲間を仰ぐ
- ・秘法にて天空の夫を呼べないか 卒寿の宴にわれ招かれて

- ・告げらるる病名の重さ今さらに子を抱き眩くダウン症と
- ・子の病一生活らぬと医師の告ぐわたしは耳を覆ひてゐたる
- ・前へ向かふ選択のみを決めたる朝夏の日差し酷なる眩しさ
- ・遅き歩み日をつぎ成長する娘 一步二歩三歩われに近づく
- ・「おかあさん一緒にそだてやう」声掛けの指導員若く頼もしき顔
- ・中学の日日を楽しくうけとめてこぼるる笑みにわれの和める
- ・ほどほどの幸せなれどそれで良い庭の南天朱の色の増す
- ・子の老いを身に感じつつ寒入り日祈りを編みて天に放てり

### 特別賞

岸野 和夫(水甕)



1923年生まれ  
高砂市在住  
「青紅」を経て78年「水甕」に入会  
歌集「緩垣」  
趣味 詩吟 旅行 写真・カメラマニア

### 謂れも高き故郷よ

- ・山青く謂れも高き故郷に一世紀生かされし幸思ふ



- ・西日笠北高御位東は石の宝殿に抱かれて我が故郷の春日豊けし
- ・菅公を斎き祀れる故郷に誇りを持ちて育ち老いけり

平成30年度

「兵庫短歌賞」選考経過

小林幹也

平成30年度「兵庫短歌賞」の選考は3月20日、神戸勤労会館にて行われた。応募総数37。そのなかから、選考委員8名が1位に10点、2位に9点という具合に、以下10位まで点数を入れ、それを集計したものをもとに討議を重ねた。その結果、以下のように決定した。

・兵庫短歌賞

矢野一代「うぶ毛」

一海美根「自由のかたち」

「うぶ毛」は、小さなことを掬い上げて、それが詩になっていると評価された。最後の4首が失速しているとの意見もあったが、自分の悩み、弱さに対して正面から立ち向かおうとする反骨精神もあり、兵庫短歌賞にふさわしいとされた。「自由のかたち」は、読者に謎解きの楽しさを感じさせてくれると好評だった。それは逆にいえば、読み取るのに時間がかかるということだが、作品に迫力があり、時代の移り変わりによる価値観の変化もしつかり捉えられたものであった。

どちらを兵庫短歌賞とするか、一作に絞るべく討議に多く時間がかけられ

- ・秋祭り牛谷里の里獅子は天を舞ふかに長き毛を振る
- ・尉と姥手植の松に栄え来し高砂今や新興の町

たが、両作とも違った魅力があり、今回は二作受賞と決まった。

・新人賞

高山葉月「化粧」

森永理恵「最近アドバルーンを見ません」

新人賞も二作受賞となった。「化粧」はひとつのテーマから郷愁に訴えたり、ユーモアに落としたり、多彩な読み方をしている点が目立った。ただ技巧面に粗さが見られるとの意見もあった。「最近アドバルーンを見ません」は突然の転調、ずらしがうまい。一見離れているものを組み合わせ、妙に読者を納得させてしまうと評価された。一方で、読者が迎え入れてやらないと分りにくい歌であるとの声もあがった。

・奨励賞

水田三和子「祈りを編みて」

ダウン症の子どもの親の視点から詠んだ歌であり、作者が短歌を詠むことで浄化されて救われていく過程が読み取れ、短歌にこういったカタルシス効果があることを改めて教えてくれると評価された。

・特別賞

木下加代子「如月の風」

岸野和夫「謂れも高き故郷よ」

両作とも年齢を感じさせない前向きな姿勢、達者さ、自在さが見られ、評

価された。

なお他に鈴木裕子「鏡のわたし」、大江美典「青い菊花を咲かせるやうに」、石原智秋「夢か現か」、渡辺啓子「駱駝の首に」、矢野義信「S字カーブ」などが選考過程で注目され、話題に上った。

選考委員 安藤直彦・尾崎まゆみ・桂 保子・小谷博泰  
小林幹也・中川 昭・藤岡成子・三津野幸代  
事務担当 鈴木裕子・藤本美智子・山田 文

兵庫短歌賞全応募者(到着順・敬称略)

(公募・ノミネート)

藤本太子・上村武男・大江美典・嶋澤 隆・内山嗣隆・杉村芳美・老月良一・高田奈加子・高山葉月・石原智秋・山本圭子・郡 英子・空地秀晃・矢野一代・遠藤和子・藤原暁美・芝本政宣・前谷節子・宮崎 浩・岸本万由美・一海美根・矢野義信・渡辺啓子・遠藤瑛子・中山敬子・朝倉恵子・辻本和美・西村 徹・水田三和子・伊藤敦子・臼井てる子・眞住 彰・木下加代子・塩見俊郎・鈴木裕子・岸野和夫・森永理恵(37名)

受贈歌集・歌書(兵庫県内分)

☆『メビウスの帯』2018年11月  
海市短歌会合同歌集 北羊館

☆『鏡像』2019年2月 山科真白  
明石多美子  
ながらみ書房

☆『鏡像』2019年2月 山科真白  
ながらみ書房  
鏡像にいつはりなきや吾の奥の永久に触れよとかひなを伸ばす

新年会の記

1月21日(月)、ポートピアホテル29階の聚景園にて新年懇親会が開催された。参加者30名。司会は芝本政宣・藤岡成子各氏。

安藤直彦代表の挨拶のあと、大阪歌人クラブ短歌文学賞受賞の浮田伸子氏と兵庫県こうのとり賞受賞の飯田進氏に花束を贈呈。浮田氏は「美しい日本の言葉をパトントンタッチしていかなければならぬ」、飯田氏は「地域の活動にたいしてのありがとう賞です」と述べられた。

出席者最高齢の岸野和夫氏の力強い乾杯の発声のあと、なごやかに歓談しつつ食事へとつづった。自己紹介につづき、それぞれのテーブルごとに隣のテーブルから回ってくる言葉をもとに言葉をつなぎ一首を完成させる歌合せゲームに興じる。できあがった歌は安藤代表が美しく墨書され披露された。11時30分よりの3時間は楽しく過ぎ、生田よしえ副代表の閉会の挨拶、記念撮影ののち散会した。

《歌合せゲームの力作》

・ポートピア海を見下ろす高層のわれは大王きみはマドンナ (山本圭子)

☆『カシオペア便り』2019年2月  
小谷博泰第十二歌集 私家版

☆『猪名川』19号 2019年3月  
足立晶子短歌教室

三郎に五四男二三子はわが恩師雲の切れ間に笑い声聞く 高橋 昭子





二人の暮らし、前には夫が居て晩酌を嗜む。秋は熱燗に限ると夫。夕餉のひと時。「みんな違ってみんな良い」作品に触れることができ、幸せでした。

心にどく歌(四十二〜八十二)

芝本 政宣

- ① 治道の木々少しづつ紅葉すホットコーヒーミルクたつぷり 老月 良一
- ② たれかれに話せぬ胸裡をおもふ庭せはしき蟻を指にはじけり 大塚 照美
- ③ 切れ長にけものめきたる影ざらり動物園の夏へわけ入る 尾崎まゆみ
- ④ さまざまにゆるされて来し身をふかくかがめて夜ふけ髪を洗ひぬ 小野はつね

- ⑤ 庭石のひとつに父の軍服を曝せばかすかに波の音する 桂 日呂志
- ⑥ 洗面所に子らの踏み台ありし日々 牛乳石鹸ほどの幸せ 加藤 直美

- ⑦ 秋の世の月の下にて物思ふこともあるべしキムジョンウンも 金治千恵子
- ⑧ 夾竹桃ほどに綺麗じゃないけれど吾も毒持つ言の葉を吐く 神山やよひ

- ⑨ 我尚も生きむと念ふ九十四歳庭にサンシュユと花木木植う 岸野 和夫
- ⑩ 瀕死なる仔鹿を更におそふ犬棒もて叫び追ひ払ひたり 岸本しげ子

①この軽さが心地良い。②心の鬱屈が「蟻を指にはじけり」という表現でうまく立ち現れている。③人は勝手にも獣を動物園に閉じ込めている。獣は人を襲わんと隙を狙う。「夏にわけ入る」が効いている。④構成が見事である。自己省察に満ちた佳品である。⑤先の大戦の傷跡は七十有余年を経ても消えない。「かすかに波の音する」が余韻を残す。⑥「牛乳石鹸ほどの」の具体的表現が、読み手の心に強く届く。⑦政治を戯画化しているようにも読めるが、私は、時空を超えて人が持つ心を上手く捉ええた作品と読んだ。⑧このストレートさが面白い。グサツと刺さる。⑨命の賛歌に感動した。⑩情景がはつきりと浮かんでくる。韻律と相まって作者の気迫が伝わってくる。

魅力あふれた十首(八十三〜百二十三)

矢内 温代

- ① 母が逝き父が逝きたるふるさとの家の軒端につばめもどり来 木南 英子
- ② 人間になくて自然にある永遠風がさくらの芽吹きうながす 楠田智佐美
- ③ 風にさやぐ楠の若葉は精一ぱい今年も生きんと雄たけびをあぐ 久米川孝子
- ④ さみどりの若葉がしきりにそそのかす脱いでおしまいこの世をすつぽり 黒崎由起子
- ⑤ 紀の里ははや曼珠沙華曼珠沙華幼なじみの枢ゆく道 郡 英子
- ⑥ 限られた方寸の空病窓に鳥は過りぬ月昇りゆく 許斐 妙
- ⑦ 碎かれし光をしづめ透きとほる滝壺の底ゆらぐ 六月 小松カツ子
- ⑧ ペッパーと握手をせしが冷たくてA Iの未来おぼろに不安 芝本 政宣

⑨ 君とわれ互みに照らし合ふごとしふたつ花火の燃ゆるときのま 新屋 修一  
⑩ 寒さ過ぎ麦の緑の増す畑にいいぞいいぞと吾は麦踏み 菅野 仁政  
① 両親が逝き寂しくなった故郷の家につばめが帰って来た。それは在りし日と同じ光景である。作者は心の中で両親と語り合ったことであろう。② 初句から三句まで誰もが思うことではあるが歌にすることは難しいのに下の句とうまく繋いでいる力量に敬服する。③ 楠の若葉の雄たけびは、作者自身の雄たけびであろう。まるで自画像を見るようだ。④ 盛んな若葉を見ていると自分もふと変身したくなることがある。下の句の独自性が恐ろしくも魅力的である。⑤ 二句から三句へのリフレインが結句への助走のようで悲しみを倍加させる。⑥ 素材としては良く見かけるが病室の空間と時が詠まれて深い。⑦ 読者を滝へと誘う歌の力がすばらしい。⑧ 体温を持たぬペッパー君のさみしさと未来への不安が出てくる。⑨ 手花火の美しさ、儂さに詩情があふれた作品。⑩ まだ麦を踏み農作業が営まれている心強さ、日本の原風景を味わう作品となった。

歌の個別と普遍と(百二十四〜百六十四)

安藤 直彦

追ひこして行きし車も止まりをり赤信号を待ちあゝる列に 菅原 艶子  
そら豆のさやをボンボン折る音の耳に残りて春待つゆふべ 住江 艶子  
両手足思案もるとも投げ出して死んだ形で浮いてみる風呂 高井 忠明  
わが国の桜のやうにジャカラダ藤色に咲く十月の春 高山 葉月  
たずぬれば今も色濃くかきつばた咲きて逝きたる人の恋しき 武内 栄子  
橋の上にはぼんやりしをれば二三人寄り来て共に深みを覗く たなかみち  
夕暮れて水管橋に点る灯が夜の水面に降りて煌めく 都築 和子  
突として二十重の花弁くづれ落つ溢れる思ひせき切るやうに 富田 成子  
冬の雨傘うつ夜のさんのみや飛沫のごとき孤独に濡るる 中川 昭  
この花にはこの花に来る蜂ありて凌霄花にあの黒き蜂 西川 洋子  
「よい歌」とは何か、種々の見解があろうが、一つには、身めぐりの小さな個別・特殊の「こと・もの」が普遍を帯びて外の広いところに繋がっていく、そのあわいの窓のところにあるようなことを私は思い描く。「往きて帰る心の味」(芭蕉)ということであろう。かつ、それをそうもたらずには精確な言葉の斡旋とその調べの大事がある。選外となつたお歌、へ姫女苑高し水平線丸し瀬戸大橋はましぐらに夏 鈴木紀子、へ何にでもなれると想つたあの頃に擦り切れるほど聞いたレコード 鈴木裕子、へ日の脚の畳にとどかずなりてきて馬酔木が白く房をたらせり 高橋亭留子、へ山上に霧雨は降りまぎれなく時鳥なくをしやし聞きおり 田淵昭弘、などもいい。へ柿くへばどこかで鐘のなりさうなこの山里の時間空間 田岡弘子、なかなかの味わいなから結句「時間空間」と理ら

ず言外に置いた方がよいのではないか。〈朱鷺色のむくげの糸まふ上枝ぬけ青筋鳳蝶わがまへを過ぐ 西五辻芳子〉この作もなかなかだが「むくげの糸まふ」のここでの擬人化表現はいかがか。

秀歌十首 (百六十五〜二百五)

青田 綾子

①閉じられた老舗の店先空っぽのショーウィンドーを風が撫でゆく

野田 巧子

②芽吹くもの日ごとに増ゆる朝の庭屈みて眺めゆきて眺む

長谷川 瞳

③巡り来て又袖通す日のあるやなし冬物一式洗いまいぬ

東根千鶴子

④鬢付けの香りほのかに漂わす二十歳の力士播但線 春

ひさの 盈

⑤北風の荒びはピアスの輪をくぐり芽吹き梅の細枝ふるはず

廣庭由利子

⑥凍星のちさき煌めきあふぎなば眉間かすかに疼く孔あり

藤本 朋世

⑦杉原紙の白色深き紙の雛くれなぬの点ひとつ打たるる

藤本 則子

⑧雲間より天使の梯子くだりきて明石海峡に流すくれないの帯

船橋 貞子

⑨未枯れてもなほ銀に陽を反す薄野を来て風の声聴く

牧野 秀子

⑩寒の滝にうたれ荒行終りたる女の白衣の胸もと尖る

増井 定子

①衰退一途の国の側面を的確に写し、結句でやわらかく治めた。冬か春か風に万感が籠る。②下句のリフレインが芽吹きどきの喜びを表出し、景も広がる。③上句の吹きのような感慨が、巡る季節と夫君への思いを深めている。④ローカル線での珍しい一齣を写し、若々しく幼な力士像をたちあがらせた。春が効いている。⑤二句、三句の個性的で鋭い感覚、結句の実景も余韻がある。⑥繊細な美的感覚、短歌本来の美しい韻律がひびく。⑦杉原紙が生きている。紅の小さな点が印象的。冬から早春への張りつめた季節感がある。⑧明石海峡が一首を生かしている。大きな懐かしい景が広がる。⑨結句に作者の感性の豊かさやわらかさがある。上句の景もていねいに写してある。⑩結句の具象が寒行を終えたばかりの女性の内面までをもうかがわせる。以上、季節を捉える感覚の冴えと、優れた結句によって私が魅かれた十首を選びました。

やまやまに豊かな時間 (二百六〜二百四十七)

足立 晶子

自販機にマシンの如く缶満たす電車来る間の三分見惚る

三木 雅子

電車を待つ三分間でも見惚れるものはある。手際よきにマシンの比喩がよい。

語らへば応へるときわが影ときさらぎの土を掘り起こしゆく 三津野幸代

二月の土を掘り春播きの準備か。己が影と語りながら、春を待つ思いを出す。汝が頬に触れられぬまま春が過ぎ熟れたる桃の皮をむきおり 森垣 岳

想う人の頬に触れられずに桃の実る季節。桃のうす皮を剥くことと切ない恋

情が響き合う。

十四歳の春の写真の回りくる同窓の席にルーペをそへて

森嶋 郁子

ルーペを添えて写真が回る同窓会。十四歳とルーペが歳月を物語りほろ苦い。

空豆に似ると誰かが詠ひぬき子規の横顔爽より出づる 楊井佳代子

誰も見知る子規の横顔が空豆の莢から出てくる。「誰かが」も楽しい一首。

昼間見しメタセコイアの秀つ枝まで登りゆく水思ひつつ寝る 矢内 温代

寝る前メタセコイアの樹液が枝を登る様が浮かんだ。満たされた眠りだろう。

介護ならなんでも相談くださいの看板大樹にもたれかかれり 矢野 一代

介護の宣伝が多い。「寄らば大樹の影」と思わせるユーモアとアイロニー。

峽の田は刈田となりて労働の形のままに春までを待つ 山中 洋子

刈田となったり、刈り残ったり、労働の形がいい味を出して春が待たれる。

針先のようなメダカの稚魚泳ぐ急発進また急旋回して 吉田千代美

メダカの稚魚をよく見ている。対句にして躍動感、リズム感を出している。

七十年過ぐれば忘れ去られけり印度りんごもシベリア捕虜も 吉野 節子

シベリアで亡くなった父と印度りんごが記憶の中で重なっている。戦後七十年も辛い思い出を持つ人々には、時間の重さが違うだろう。

愛・恋

黒崎 由起子

この青は君が塗つたと思ひます芯まで澄みて清らかな空

安藤 三從

疼さへもばら星雲と呼ぶ君の口づけのたび若葉の芽吹き

大江 美典

万華鏡重なるもあり散りぢりに君との距離間測れぬままに

許斐 妙

君とわれ互みに照らし合ふごとしふたつ花火の燃ゆるときのま

新屋 修一

君を想う時間の中に溶かされてわたしは今年の夏を失う

辻本 和美

君がわれに手を振り駆けりきたる日の草の緑はいまもあたらし

中川 昭

かすれ声で好きだと言われてしまつてはやっぱり流れに任せる海月

前田 美樹

初夏の苑にあかるき緑満ち木下の闇に君を隠しぬ

真砂 晃美

手を振れば手を振り返す坂道のふりむく君の背な消えるまで

政野 哲子

動物・植物

牧野 秀子

車椅子ごと乗り入れて麻痺の子が羽化待ちており菜の花の海

青田 綾子

あまがへる墓の刻みに潜みぬて保護色とふもさびしきものぞ

安藤 直彦

でんせんの雀三羽のこゑひくし少女ひとりりを失へるまち

生田よしえ

人間になくて自然にある永遠風がさくら芽吹きうながす

楠田智佐美

つるつるり剥けば垂りゆく柿の皮 ゆつくりあれよ生の余りを  
何もかも知る母牛は潤む目に見つめおり競りの日の朝  
ぜんぶ全部知つてゐたよと泣いてゐる木霊のこゑのやうなかなかな

冬のひかり聚めてしろき山茶花は生死のそとのしづけさにあり  
その眸に一番星を映しつづつ影となるまで海を向く馬

藪椿夜も咲きをりシベリアゆ七十年かけて遺骨還らむ

旅

風の島銅鐸の島花の島 いくたび巡りいくたび楽し  
浄土ヶ浜何も変わつてないように海猫の声空に散らばる

あかあかとデイゴの花咲く公園の上を軍用ヘリの飛びゆく  
石切り場の石に灰いろの蜥蜴めて皇帝アタワルバを知るとし言へり

仙丈ヶ岳の山道登り汗一斗かくを樂しむここ甲斐の国  
死体焼く身分によつて薪の加減カースト残る厳しい現実

志賀直哉旧宅を過ぎなほ下る夏の日射しを肩に浴びつづ  
思ひ出の知床の地に同行す妻の遺影は背のリユックに

急峻の峠路に祀る地祇旅とは常に神の領域  
腰おろすベンチがワルツを奏でだすシヨパンの生地ワルシヤワの町

自然

凍雲のかなたひそけく月の蝕闇にうつすら朱を滲ませて  
吐く糸におのれ閉じ込め天蚕の繭はさみしもその色知らず

ゆつくりと闇のころを食べてゐるけものやうなゆふぐれの月  
送るものもいつかは送られふつと山のなだりに消ゆる炎は

砕かれし光をしづめ透きとほる滴壺の底ゆらぐ 六月  
青春とう溶けずに残る氷片がせりせりとわが三半規管に

臆病に逃げて半生一生のゴッホのごとく耳も切らずき  
台風の過ぎし朝に虹かかる増位連山ひとまたぎして

冬みうらら水鳥なれば聞こえぬむ空と海とのひびきあふ音  
前うしろレール断たれて公園に錆びゆくままの蒸気機関車

生活

生きるとは生きる事なり窓ガラス拭きつづ思ふおながが空いた  
青箱の牛のお乳は膨らんで母のほひの牛乳石鹸

藤本 則子

石橋 妙子

朝倉 恵子

尼子 勝義

桂 保子

鎌谷 克子

北口 康雄

小林 幹也

嶋澤 隆

中島眞喜子

森嶋 郁子

福島 妙子

藤井 幸子

内山 嗣隆

尾崎まゆみ

楠 誓英

小松カヅ子

辻本 和美

中川 昭

馬場 久雄  
藤本 朋世  
山内 良子

矢野 一代

石原 智秋

加藤 直美

さびしさは寒さにも似て身の内に力をぐいと入れるきさざらぎ  
歩幅の違うわたしたちが歩く度広がってゆく夕映えの道  
風聞の流れに抗ひ福島産米の五キロの持ち重りする

終着駅の線路の端に佇めば六月の風鉄の匂いす  
古い二人の少ない未来のこの先はあるよな無いよなり残したこと  
ほろほろと消えゆく記憶瑠璃色の母の浴衣は風によじれて

退会と書きし一葉かすかなる迷ひの音にポストを落つる  
髭を剃りネクタイ結べば父の顔消えて男の月曜の朝

生・老・病・死

冬のひかり聚めてしろき山茶花は生死のそとのしづけさにあり  
有りのままに生きてゆきたし穂すすきがそれでいいよと頷き返す

終活の遅々と進まず捨てられぬ黴のはえたる夫の靴拭く  
有り余る余生の午後には這う毛虫眺めておりぬ道渡るまで

情念のうすれゆくこそかなしけれ老いはそよると斜めから来る  
抗がん剤受けつつ乱れ見せぬ友焼き付けおかむ吾がまな裏に

ひとりでは生きてゆけない私の胸に入れたるペースメーカー  
まなうらに昨日の黄の花ゆれてをりこの世にぬい会ひたいひとは

ふるさととは花いちもんめ永遠の不在となりしあなたが欲しい  
兵の日を語るなく農夫逝きにけり爪の間に土ためしまま

保田 ひで

藤本 朋世

牧野 秀子

岩田美代子

高井 忠明

藤岡 成子

栗山 文子

西塚 洋子

楠 誓英

郡 英子

青田 綾子

兵庫県歌人クラブ 年刊歌集第五十九集作品募集案内

作品 十首(過去一年間の自作、既発表・未発表問わず)・題を付す。  
式 四百字詰め原稿用紙(A4判)二枚に楷書で明記し、右肩を糊づけ。

参加料 一行目に①題名 ②氏名(題名の下に書き、必ず「ふりがな」を付す)  
二行目はあけ、三行目から③作品十首 ④二枚目の末尾に所属結社

かな遣い または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記す。  
新・旧いづれかに統一し、歌稿右肩欄外に新・旧の別を明記す。

送付先 問わない(会員・非会員の別なく誰でも参加できる)  
令和元年八月二十一日(水) (当日消印有効)  
〒665-0855 宝塚市売布きよし方丘六の五

桂 保子方 兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会あて  
TEL 〇七九七-八四一八八八一



地区通信

〔阪神〕1月5日、奈良吉野山吉水神社(佐藤一彦宮司・ヤママユ)の後醍醐天皇玉座の間に新春献詠祭が行われた。天平装束を纏った中田文花氏(ヤママユ)の五節の舞と尺八演奏(佐藤氏)奉納の後、歌会始めを開催。披露は冷泉流、御手洗靖大氏(心の花)。出席は田中教子・萩岡良博・橋本至紀子・武富純一・吉野節子各氏他数名。

〔吉野節子〕(吉野節子) 〔神戸〕11月20日、海市短歌会25周年記念合同歌集『メビウスの帯』刊行。▼11月24日、海市短歌会神戸チサンホテルにおいて25周年記念大会を開催。中川昭・明石多美子・三井英美子・藪内真由美各氏他24名出席。▼1月9日、文学圏は花の北市民広場にて新年歌会を開催。出席者15名。▼1月31日、ホテルヴィスキオ尼崎にて花鏡新年歌会を開催。参加者39名。▼2月2日、ホテルセントノーム京都にて関西潮音新年歌会を開催。参加者40名。神戸から11名参加。▼2月12日、文学圏は運営委員会において、顧問・下村千里、発行人・浮田伸子、編集人・青田綾子各氏を再任した。

▼3月30日、エルおおさかにて浮田伸子氏は平成30年度大阪歌人クラブ短歌文学賞を受賞、参加者青田綾子氏他6名。▼4月9日、生田神社において曲水の宴を開催。歌人安藤直彦・中川昭・新屋修一・廣庭由利子・前田美樹・矢野一代各氏が参宴。▼4月11・16日、さんちかホールにおいて第49回神戸まつり「神戸の百人色紙展」開催。尾崎まゆみ・楠誓英・黒崎由起子・中川昭各氏が出展。

〔黒崎由起子〕(黒崎由起子) 〔明石〕11月23日、明石市生涯学習センターにて「第45回明石市文芸祭表彰式」を開催。短歌一般部門の応募数455首、選者楠田立身氏。ジュニア部門の応募数925首。選者田岡弘子氏。表彰式の後、選者の講評。▼11月24日、明石ペンクラブ通信第17号を発行。▼11月26日、明石市柿本社にて「第161回柿本社秋季献詠祭」を開催。選者楠田立身氏。兼題「魚」、競点題「歌」。出詠・祭典参列者、石飛俊郎・三宅隆子・伊藤敦子(選者賞入選)各氏。▼2月2日、明石大門短歌会は明石市「鮎よし」にて野瀬昭二氏92歳誕生祝賀会開催。

会館にて姫路歌人クラブ第29回合同歌会開催。出詠85首。内海水子・小松カツ子・浮田伸子・青田綾子・神保原廣己・生田よしえ・久米川孝子・新屋修一各氏他56名出席。▼3月17日、姫路市民会館にて桑原正紀氏を迎えコスモス姫路支部歌会開催。藤岡成子・久米川孝子・新屋修一・矢内温代各氏他34名出席。

〔飯田進〕(飯田進) 〔東播〕10月10日、茅花短歌会「茅花誌」第189号を発行。▼10月30日、恒例の天満小学校の短歌指導に、茅花短歌会より前田昭子・沼田俊郎・高田道夫・前田華子・西島孝子・末澤初美各氏が参加。▼1月9日、新年短歌会を開催。「茅花誌」第190号を発行。▼2月22・24日、ふれあい交流館のサークル展に茅花短歌会は会員全員の短冊を展示。▼3月2日、第1回菅公顕彰短歌大会が高砂市曾根天満宮で開催。応募総数284首。選者は安藤直彦・田岡弘子の両氏。高知・熊本・埼玉など県外の入賞者も来会し、約60名が出席。▼3月31日、「いなみ野万葉の森」創立30周年記念式典において前田昭子・山谷文子・田中忠敬各氏に感謝状が贈呈された。▼4月1日、久米川孝子氏が

「姫路市制施行130周年記念表彰を受ける。▼4月10日「茅花誌」第191号を発行。▼東加古川短歌会は、毎月第2金曜日13時より加古川総合文化センターにて短歌会を開催。連絡先、新屋修一氏。

〔前田昭子〕(前田昭子) 〔中播〕10月28日、第36回子規顕彰全国短歌大会永田和宏選特選、阿部綾子氏(水甕)。▼1月31日、いちかわ新春短歌会(いちかわ文化協会主催)にて小畑庸子氏(水甕)が選歌と総評を務める。出詠59首。ひさの盈・内山嗣隆・青田綾子各氏が入選。▼2月9日、第13回神戸河町文化祭(神戸河町文化協会主催)にて小畑庸子氏(水甕)が選歌と選評を務める。一般の部出詠57首。高校生の部119首。(生田よしえ) 〔北播〕11月23・24日、アステリアかさいにて第52回加西市文化祭文芸祭開催。短歌部門応募数一般の部186首。一般の部市長賞岩井清津子氏(加西市)、ジュニアの部市長賞長岡秀磨さん。一般の部選者桂保子氏。▼11月25日西脇市総合市民センターにて西脇市短歌大会開催。応募数一般の部145首、学生の部327首。一般の部特選一席本田しおん氏(武蔵野市)、

学生の部特選佐之瀬友葵さん(東条中三年)、中田有哉さん(西脇小五年)、濱田沙雪さん(水丘小三年)。一般の部選者尾崎まゆみ氏。▼三木市で昭和21年9月に創刊された丹生短歌会の「丹生」は、創刊70周年を祝い、「丹生」第70巻記念号を12月に発行。▼平成31年1月6日、三木市中央公民館で70周年記念新年会を開催。▼4月29日、西脇市高松町長命寺内宝光院にて第40回源三位頼政公奉賛献詠短歌大会開催。応募数81首。特選第一席は角田勝子氏(西脇市)。選考は北播各地区幹事15名。講師は三村時枝氏。

〔芝本政宣〕(芝本政宣) 〔西播〕2月6日、西播磨短歌祭部会。内海水子・飯田進・小松カツ子・岡本光代各氏参加。30年度の反省と次年度の運営について協議。▼2月21日、第40回たつの市新宮短歌祭開催。出詠数は、一般89首、学生294首。選歌及び講評ニ子勝義氏。▼2月27日、西播磨ふるさと文化芸術振興事業実行委員会。短歌祭部会長としてニ子勝義氏出席。▼3月16日、佐用情報文化センターにて佐用短歌連盟春季短歌大会開催。春季大会賞(山深く寺に人影なき道に一筋続く竹箒の跡(植田倍次氏))。応

募数27人50首。議会議長・文  
化協会長・安藤直彦・菅原艶  
子・船引貴明・竹田幸男各氏  
ら25人参加。▼4月27日、赤  
穂市において第35回花梨忘歌  
会開催。出詠数40首。歌評・  
講演尼子勝義氏。

(尼子勝義・安藤直彦)

【但馬】12月14日、朝来市ヒ  
ハナ公園にて短歌会「歩」  
三十一字展。▼2月10日、新  
温泉町にて「前田純孝賞」学  
生短歌コンクール入賞作発表。  
応募5419首、選者佐佐木

幸綱氏。▼3月6日、但馬文  
化協会「たじま作品集第43集」  
発行。▼3月末日、但馬高齡  
者生きがい創造学院短歌教室  
「翔第15号」発行。▼4月2  
日、17日、「前田純孝賞」入  
選作品イラスト展。▼4月28  
日、朝来市大蔵市民会館にて  
竹柏会「心の花」主催「じろ  
はつたんの里」歌会。▼5月  
20日、豊岡市民会館にて「但  
丹歌人会主催」春の大会開催。

(足立勝蔵)

【淡路】11月、東浦短歌会(代

表片山田佳子)では、年刊歌  
集『給水塔第44輯』を刊行。  
会員11名、各30首収納、歌数  
330首。▼12月、千鳥短歌  
会(代表山田恵子)では、年  
刊歌集『ちどり23号』を刊行。  
会員15名、各10首収納、歌数  
150首。▼3月、淡路歌人  
クラブ『年刊歌集6』を刊行。  
会員作品及び全淡短歌祭入賞  
作品を掲載。発行者清水昭男  
(島田英樹)

追悼

篤実温厚の人

田中義昭先生



奇跡的に無事で事後処理に当  
たられたとのこと。

・重油かけ屍体焼く時停止せ  
る思考は遂に慟哭となる

人生の最初に衝撃的な出来  
事に遭遇されたが、生まれ故  
郷の社に帰られた後は順調に  
教職の道を歩まれた。その一  
方、昭和二十九年に丹生短歌

二〇一九年四月十一日、丹  
生短歌会の田中義昭先生が逝  
去された。享年九十二歳、決  
して早くはないが、短歌の手  
ほどきを受けた者にとっては  
残念でならない。

先生は広島高師の学生の時  
に爆心地近くで被爆されたが

会に入会され、以後多くの作  
品を発表されている。兵庫県  
歌人クラブにも早くから参加  
され昭和四十七年に新人賞を  
受賞、また長年幹事としてク  
ラブの発展に尽くされた。創  
立記念行事や各年の新年会  
では何時も多くの人に囲まれ

和やかに談笑されていた。又、  
北播短歌連盟の会長を長年に  
渡り務められ、この地区の短  
歌の隆盛にも力を尽くされた。  
丹生にあつては平成五年に代  
表に就任され、会員の育成と  
会の発展に尽力された。指導  
は人により強弱の差こそあれ  
常に誠実に向き合われ、未だ  
に多くの会員に慕われている。  
先生の若い頃の作に次の一  
首がある。

・遠き田に身重の妻が田植を  
り美しなどと言ひてはをれず  
良き夫であり父でもあった  
先生が偲ばれる。

合掌  
兼貞靖行

受賞しました

☆平成30年度大阪歌人ク  
ラブ 短歌文学賞受賞  
平成31年3月30日

浮田伸子  
☆姫路市制施行百三十周  
年記念 感謝状受賞  
平成31年4月1日  
久米川孝子

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、  
また風ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。  
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれ  
た環境にある短歌会です。月一回、第一  
土曜の午後行われる例会は活気に満ち、  
和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表 山田 恵子  
〒656-0426 南あわじ市榎列大榎列  
七五一―五  
☎(〇七九九)四二二〇六二

茅花短歌会

短歌文学の鑑賞と作歌についての研  
修を行い、清新自由で個性に応じた  
作歌を目指します  
毎月第二水曜日九時半よりふれあい交流  
館で勉強会  
季刊誌「茅花」を発行

講師 沼田 俊郎  
代表 前田 昭子  
〒675-1113 加古郡稲美町岡二六三〇  
TEL (〇七九)四九二一七六六  
FAX (〇七九)四九二一七六六

丹生 TANZYO

生活写実を主体として真剣に作歌  
力を深めようとする集り  
昭和二十一年  
兼貞 靖行  
〒673-0424 三木市自由が丘本町  
2-232  
☎(0794)83-0803  
編集同人 井口通子・林 茂代・藤井貞子・  
前中 仁・兼貞靖行・上倉佐田子・  
山中洋子・山本樹一・土居きよ  
〒673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5  
山中洋子方  
☎(0794)84-0296  
事務局先 00950-9-195197  
振替口座

潮音

大正4年創刊  
木村 雅子  
鎌倉市扇谷3-11-4  
石橋 妙子  
神戸市東灘区岡本2丁目7-2-211  
三津野幸代 TEL(078)431-8665  
神戸市東灘区青木2-2-1-617  
増井 定子 三津野幸代  
山本みよみ 安田千富美  
島崎 雅子  
幹事 三津野幸代  
計査 安田千富美  
会監 島崎 雅子

津布良

代表 兎田 孝子  
編集員 遠 洋子  
阿部ツヤ子

発行所  
〒661-0046 尼崎市常松一―九二二九  
松村 和子  
TEL (〇六)六四三三一五五三七  
FAX (〇六)六四三三一五五三七

### 水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」

編集 小松カヅ子  
生田よしえ 楊井佳代子  
藤本 則子

発行 小畑 庸子  
〒679-2131 姫路市香寺町犬飼366  
☎079-232-2380

会計 芦田 礼子  
〒672-8035 姫路市飾磨区中島1097  
☎079-235-6831

### 姫路歌人クラブ

顧問 水野 美子 楠田 立身  
代表 小畑 庸子  
副代表 内海 永子 飯田 進  
会計 青田 綾子  
会計監査 首藤 幸子 新家イサ子  
事務局 〒671-2224 姫路市青山西四丁目五十六  
☎(079)二六七二七六七

### とべら

(月刊)

代表者 尼子 勝義  
発行所 赤穂短歌の会  
とべら発行所  
〒678-0163 赤穂市高雄1876-1  
尼子方  
☎(0791)48-0137

### 旅 笛

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編集 角倉 羊子  
黒崎由起子  
小笠原明子

旅笛の会  
〒178-0064 東京都練馬区南大泉2-23-8 梅村方  
角倉 羊子  
〒651-0052 神戸市中央区中島通1-1-25-102  
黒崎由起子

### 文学 圏

創刊昭和21年

顧問 下村 千里  
集人 青田 綾子  
発行人 浮田 伸子  
発行所 〒651-2276  
神戸市西区春日台1-8-1 浮田方  
☎(078)961-5676

編集委員 内山 嗣隆・宮脇 経子  
山本 圭子・山本 君子  
吉田千代美・吉永久美子  
会計 平野 隆子

### 西脇短歌会

会長 藤中 光代  
副会長 三村 時枝  
々 藤本 勝子(事務局)  
会計 高瀬満由美

事務局  
〒677-0043 西脇市下戸田578  
藤本 勝子  
☎(0795)23-2377

### 林間阪神支社

〒662-0944 西宮市川添町一―一四  
☎(0798)三六一一九〇七

伊藤佐重子 石黒 陽子  
今西シゲ子 内井 幸子  
倉橋 愛子 芝淵田鶴子  
登島 政利 南 操子  
吉村すゑ子

### ポトナム姫路支部

(姫路) 西門 和子  
(佐用) 新家 イサ子

連絡先  
〒671-2247 姫路市緑台1-7-1  
羅川 範子

### 白圭

編集委員 内海 永子  
鎌谷 克子  
川上千鶴子 幸子  
塩澤 文子  
首藤 幸子

発行所  
〒679-4003 たつの市揖西町小神297-1  
内海 永子方  
白圭社  
☎(0791)63-4734

### 玲 瓏

[玲瓏の會]

塚本邦雄詩歌アカデミア迫眞的想像力の  
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送稿要領見本誌  
御希望の方は  
〒262-0026 千葉市花見川区瑞徳二丁目1-1  
ガーデンプラザ新検見川2-906  
塚本 青史方  
Tel/Fax 043-211-6704  
http://www.imxprs.com/free/reirounokai/reirounokai

### 美加志保短歌会

創刊 昭和二十一年十一月

〒675-1304 小野市中谷町二二六七  
編集兼発行人 山本 満代  
☎(0794)六七〇八二四

### 波濤神戸

発行人 保田ひで  
発行所 波濤神戸支部  
連絡先 〒653-0852  
神戸市長田区山下町1-5-15  
保田 方  
☎(078)612-9294

富岡 田 保田  
経子 知子 ひで

### 六 甲

昭和八年創刊

代表 田 岡 弘子  
顧問 志 方 弘子  
編集委員 石原 智秋 牧野 秀子  
青山 俊代 黒川 明子  
村瀬 美雪 阿部 明美  
加藤 容子 小島 和子  
西村 紀子 鈴木 裕子  
小 田 弥 生

会計室  
〒673-0845 明石市太寺四―一―三〇  
☎(078)二二二三

### 水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています  
お気軽にご参加下さい

◇第一土曜日 午後二時より  
◇場所 神戸医療生活協同組合  
生協会館  
◇連絡先 池本 俊六  
〒651-2233 神戸市西区榎谷町福谷  
六六八一―  
☎(078)九九一〇一五五

### 東浦短歌会

代表 片山 田佳子  
毎月 第2木曜日 13時30分～  
歌会  
東浦老人福祉センターにて  
会費 月 千 円

連絡先  
〒656-2311 淡路市久留麻2346-6  
片山 田佳子  
☎(0799)74-2141



# 令和元年度ふれあいの祭典 兵庫短歌祭 作品応募要項

主催 兵庫短歌祭実行委員会・兵庫県・(公財)兵庫県芸術文化協会  
兵庫県歌人クラブ

後援 兵庫県教育委員会・神戸新聞社

## 応募要項

作品 未発表作品一人一首

締切 令和元年8月21日(水) 当日消印有効

送り先 〒675-0016 加古川市野口町長砂1217 新屋修一方  
ふれあいの祭典兵庫短歌祭事務局宛

応募料 1,000円(切手不可) ※応募者に作品集無料送付

応募方法 応募用紙またはA4の原稿用紙右面に作品一首を、左面に郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、を黒ボールペンで明記し、応募料を添えて郵送してください。

選者 兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ顧問・幹事  
特別審査委員 阿木津 英(歌人) 塚本青史(小説家)  
賞 文部科学大臣賞(予定)、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、  
兵庫県教育委員会賞、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会賞、  
神戸新聞社賞、兵庫県歌人クラブ賞ほか多数。

## 短歌祭のご案内 ◇入場無料◇

日時 令和元年11月17日(日) 午後1時~4時半

会場 神戸市勤労会館大ホール(市営地下鉄・JR・阪急・阪神・ポートライナー各三宮駅から東へ徒歩5分)

内容 入賞作品表彰と講評等  
催し 阿木津 英氏(歌人) 講演  
「短歌、これまでとこれから『折口信夫の女歌論』再考」  
ふるってのご応募、ご参加をお待ちしています。

## 伝統文化体験フェスティバル

平成31年3月9・10日、兵庫県公館

## 定型詩における自由 廣庭由利子

一四時五〇分より七〇分間、体験教室を開始。参加者は大人ばかり12人。

まず、和歌、短歌の歴史を簡単に辿った。万葉集、古今集、新古今集と、それぞれ二首を例に、特徴、背景などを説明し、近代短歌、現代の歌を紹介した。次に、与謝野晶子、若山牧水から、玉城徹、塚本邦雄、現役の歌人の歌など一三首を取り上げ、六埋め問題とした。

文語と口語、新仮名と旧仮名、外来



語の扱いなどの話をし、残りの三〇分間は各自に歌を作ってもらった。即興にもかかわらず良い作品が四首、提出された。  
・海沿ひのライブ会場ジャズ流る星の映りし波かがやきて

安藤代表

より、「会場にジャズ」とすべきで「に」は省略できないこと、また、「映りし」は過去形なので

この場合は「映れる」と現代形にすることなど助言をいただいた。  
充実した七〇分であったと思う。  
**時代を象徴する短歌 加藤直美**  
短歌講座二日目、天候は予報通り雨。開場してすぐに講座スタートということもあり、参加者は11名と少人数でしたが、皆さんとても熱心に聴いてくださり和やかな雰囲気でした。  
まず、短歌は身近なものであることを知ってもらいたく、平成の時代を象徴するような震災や、介護、家族の歌など口語で親しみやすいものを紹介し、参加者の方にも順に音読していただきました。万葉集から近現代の短歌の流れを説明した後、クイズ形式で楽しみながら短歌に触れていただきました。実作では初めてとは思えないほどの

力が揃い驚きました。  
・雨の日に三角四角とくり返し折りてみどりのカエルとなりぬ  
・オカリナで仰げば尊し吹き鳴らすシヤープが四つ半音に泣く  
参加者からは「楽しかった」「思ったより簡単だった」と感想をいただき、これを機に短歌に興味をもってもらえればうれしく思います。  
◇余滴 令和の英訳は Beautiful Harmony とのこと。調和のとれた会のなかで、歌を詠んでいきたいものです。(藤本朋世・山田文・森嶋郁子)



## 平成30年度収支決算報告書

自 平成30年4月1日～至 平成31年3月31日

収入の部 (単位:円)		
費目	金額	摘要
前年度繰越金	1,694,033	
会費	882,016	385名
結社広告費	111,000	3000×37
歌会広告費	46,000	1000×46
黒助成金	450,000	年刊歌集58号
県芸術文化協会給付金	20,000	伝統文化体験フェア
ふれあいの祭典	102,543	加西市実行委員会86,311 応募料金16,232
批評会会費	446	参加者43名
懇親会会費	16,865	総会2,500 新年会2,289 批評会6,076
預金利息	15	
寄附	23,000	前掲10,000 伊藤(他)8,000 小谷5,000
寄附	12,403	元高橋6,000 他6口7,403
合計	3,358,321	

支出の部		
費目	金額	摘要
総会補填	404,401	会費費他
兵庫短歌賞(新人賞)補填	26,598	30年度
年刊歌集補填	291,708	歌集08号 240名
会報費	605,886	199号302,987 200号302,919
経常費	20,821	ハガキ 切手代他
交際費	20,000	協賛費 他
幹事会費	16,962	会費費他
事務局費	223,083	会費証 交通費 妙外他
消耗品費	5,498	期名シール代他
伝統文化体験補填	46,598	交遊費 コピー代他
小計	1,661,555	
繰越金	1,696,766	
合計	3,358,321	

上記の通り相違ありません 平成31年3月31日  
会計 堀島 紗子  
監査 兼貞 靖行